

琉球大学学術リポジトリ

巻頭言：「キャンパスのエコロジー」

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-08-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 猛進 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42287

巻頭言「キャンパスのエコロジー」

学長 森田孟進

フランスの哲学者・精神科医フェリックス・ガタリ（1930－1992）は1990年の東西ドイツ統一、翌91年のソ連邦崩壊という新しい世界状況を分析して、今後、文化・宗教の違いから民族間の衝突・紛争が多発し、貧富の差はますます拡大するであろう、と1992年1月沖縄で開催された講演会で発言し、私たち聴衆を驚かせた。私たちは冷戦構造が終り、世界は平和的安定期に向かうと思っていたからである。今日、ガタリの予言が的中したことで私は感慨をあらたにしている。

ガタリは科学技術の発達で地球という惑星のエコロジー的アンバランスを引き起こし、生命が亡びるといった危機的状況の出現についても警告を発しているが、ガタリのエコロジー論の特徴はエコロジーを三分野に分けていることである。自然環境のエコロジーの他に、社会のエコロジーと精神のエコロジーをあげている（ガタリ『三つのエコロジー』、杉村訳、大村書店、¥2,060）。この三つのエコロジーを総称し、接合する言葉としてガタリはエコゾフィーという造語をあてている。隣の家の子供が有名幼稚園に合格したので自分の子供も有名幼稚園に入れようと苦心苦悩する母親の問題は社会的エコロジーの問題として捉えることができる。

私たちが生活しているキャンパスのエコロジーを考える時にもガタリの三つのエコロジーという考え方は大いに役に立つ。

10年ほど前までは、「学長は何もしなくてよい、そのかわり木を植えなさい」という話もあったが、今日では学外からおいでい

ただく方々から「緑豊かなキャンパスですね」という評をいただくまでになった。もっとも台風のおかげで、鬱蒼たる高木は育たず、ガジュマル等が多い。ガジュマルは力強く根を張り、気根をたれ、台風に打たれつつもこぼやしわの多い幹と枝で濃い樹影を落としている。本学のシンボルとしての「学樹」にしたいと一人でひそかに考えているところである。

全学の教職員の努力のおかげで、特に、構内の緑化に努力された有志の方々のおかげで、緑豊かなキャンパスと評されるまでになったが、「キャンパスの顔がないではないか」との指摘もある。現在、「構内環境整備委員会」（委員長・安澄文興教授）では、西原町の協力を得て、西原口を拡張整備する構想を練っているところである。西原口が本学の顔となり、医学部・附属病院のある上原キャンパスと千原キャンパスが坂道の町並によって結ばれる美しいプロムナードが出現する日も近いといえる。

さらにまた、たいへん悦ばしいことには、有志の教職員・学生のグループ（代表・伊波美智子教授）によってエコキャンパス作りの運動が始められている。中・長期的課題としてはキャンパス内に思い出となる場所、シンボルとなる場所を造ることがあげられ、短期的計画・実践としてはポイ捨て、教室・トイレの汚れ等への対策があげられているが、本キャンパスで生活する1万人の学生・教職員の「環境問題」への関心を高め、意識を改革することが大前提となるでしょう。

共通教育の総合科目として現在「環境の

科学」・「ゼロ・エミッションー地球環境時代の産業と社会」・「環境保全型農業」・「森の文化史」等の科目が開設されているが、これらの授業科目間の有機的連携をあらためて検討し、さらに環境問題に関する授業を充実することが急務である。すなわちエコロジーの問題はカリキュラム改革の中で重要な位置を占める問題となるべきである。

キャンパスのエコロジーを考える時、いまひとつ忘れてはならないのは、ガタリの

言う精神のエコロジーである。心の病で休学・退学する者もあり、さらに痛恨の極みは自殺する者である。本学では、保健管理センターを中心に学生のメンタル・ヘルスのための対策を強化充実しつつある。学生に限らず教職員のメンタル・ヘルスも視野に入れる必要がある。

50周年を期して「エコキャンパス宣言」を打ち出したいと有志の方々と一緒に思案しているところである。

(2000年3月)